「わたしたちに必要な糧を毎日与えてください」

**年間第17主日・Ｃ年（16.7.24）**

**その十人のために滅ぼさない**

早速、いつものように今日の第一朗読と福音から、あえてテーマを設定するとするならば、さしずめ「共同体とその執り成し祈りの大切さ」と言えるのではないでしょうか。

　それでは、まず、第一朗読を少し丁寧に振り返ってみましょう。

　そこで、登場するアブラハムですが、旧約聖書の最初の書物である創世記によれば、生まれ故郷ウルから、当時の民族移動の一コマと考えられる場所ハランで、彼の75歳の時、初めて神からいともスケールの大きい次のような召命を受けます。

　**「『お前の地、お前の親族、お前の父の家を離れ、**

**わたしがお前の示す土地に行け。**

**わたしはお前を大いなる国民にする。**

**わたしはお前を祝福し、お前の名を高める。**

**お前は祝福のとなる。**

**わたしはお前を祝福する者を祝福し、**

**・・・・**

**お前を通して、地上のすべての氏族は祝福される。』**

**アブラハムは、主の仰せになったとおりに出発した。・・・**

**ハランを去ったとき、アブラハムは七十五歳であった。」（創世記12.1-4）**

、それまで一緒だって甥のロトとは、一旦別れるのですが、そのロトが住み着いたソドマとゴモラ地方は一見確かに**「主の園のように、エジプトの地のように、見渡すかぎりよく潤っていた。」（同上13.10）**のですが、何と**「ソドムの人びとは、邪悪で、主に対して多くの罪を犯していた。」（同上13.13）**と言うのであります。ですから。とうとう主なる神は、今日の朗読箇所の冒頭にあるような深刻な宣言をせざるを得なくなったであります。

そこで、主なる神に対するアブラハムの切なる執り成しの祈りが展開して行くのであります。

　**「まことにあなたは、正しい者を悪い者と一緒に滅ぼされるのですか。あの町に正しい者が五十人いるとしても、それでも滅ぼし、その五十人の正しい者のために、町をお赦しにはならないのですか。正しい者を悪い者と一著に殺し、正しい者を悪い者と同じ目に遭わせるようなことを、あなたがなさるはずはございません。・・・・」**

とにかく、甥のロトが選んだ町は悪に満ちた町であって堕落した人々が溢れていたようですが、連帯責任を前提にするかぎり、**「正しい人が悪い人と一緒の滅ぼされる」**ことになってしまいます。

　ところが、アブラハムは、神のソドムに対する最終決定は、多数の悪い人に基づくのか、それとも少数の正しい者を基準にするのか、若し、後者であれば、一体何人の正しい者がいればよいのかを、神にに問い質します。いずれにしても、アブラハムの執り成しの祈りこそ、まさに共同体的祈りと言えるのではないでしょうか。

したがって、とうとう「**正しい十人のためにわたしは滅ぼさない」**という神のを引き出すことができたのであります。

　つまり、たとえ数のうえでは、正しい人が少数派であっても、本当の正しさが存在する限り、神ご自身が、この少数の正しい人たちに答えて決定を下さすという神の基本的方針にほかなりません。

　ですから、わたしたちが、今日、多数決の暴力がはびこっている我が国の政治に立ち向かうためにも、大きな勇気を与えてくれる取次の祈りの威力に希望を見出すことができるのではないでしょうか。

**共同体の祈りの威力**

したがって、この共同体的祈りは、今日の福音でイエスの弟子たちにしっかりと受け継がれたと言えましょう。そしてそれは、毎日わたしたちも唱える「主の祈り」のルカによるルーツにほかなりません。

　ところで、今日の福音は、イエスが単独で祈っておられた場面から始まります。

　とにかく、そのイエスの祈りが終わったとき、**「主よ、ヨハネが弟子に教えたように、わたしたちにも祈りを教えてくださいと」**そこで初めて、弟子たちの共同体的祈りの指導をイエスに直接願ったのであります。

　そこで、早速イエス、まさに祈りの模範を教えてくださったのであります。

　まず、**「父よ」**と言う信頼に満ちた呼びかけで始まります。ちなみに、この言葉のバックグラウンドには、アラマイ語の「アッバ」があります。それは「お父さん」というまさにの呼び方に由来していると言えましょう。

　ですから、信頼に満ちた親しみを込めて御父に呼びかけます。

　**「があがめられますように。**

**がきますように」**と。まさに神による救いの完成を願います。なぜなら、神の救いの実現によってこそ、神のが聖なるものであることが明らかになり、それによってすべての人々が神の尊い名をあがめるようになるからにほかなりません。

　次に後半では、すべて**「わたしたち」**で始まるまさに共同体的祈りが、続きます。

　まず**「わたしたちに必要な糧を毎日与えてください。」**と切なる思い込めて祈ります。

　かつて、インドシナ戦争の最中、大勢の難民がタイとの国境近くのキャンプに収容されている、特に悲惨な子どもたちの姿が特別報道番組で放映されていたときのことです。その番組を真剣な眼差して観ていた三歳になる幼児が、自分の食べ掛けていたおやつを、テレビに向かって**「これをたべなさいよー」**と思わず差し出したのであります。ところが、それを見たおじいちゃんが、お孫さんの優しい心に感動し、ご自分も何か具体的な行動を起こすべきと痛感し、それまでたくわえていた老後のためのお金から、なんと一千万という大金を、匿名でただ「孫の心より」というメモをそえて難民救済の国際的団体にそっくり寄付なさったと言うのであります。まさに、取次ぎの祈りの実践にほかなりません。

　次に、**「わたしたちの罪をゆるしてください、わたしたちも自分に負い目のある人を皆赦しますから。」**と祈ります。なぜなら、まず、神に罪を赦していただくためには、どうしても他人を赦す心構えが前提になるからです。

　今週もまた、身近なところから共同体的祈りを実践できるように共に祈りましょう。